

福山駅前アクション会議（第3回）

日時：2019年10月31日（木）18時30分

場所：エフピコR i M・スタジオA

議論内容（概要）

〈開会挨拶〉

【福山駅前再生推進部長 池田】

- ・今回のテーマは産業のリノベーションである。駅前再生は駅前だけではなくて周辺部にどう繋げていくかがポイントである。
- ・駅前から市内へ、備後圏域へと、壮大なことを考えているが、潜在能力からすると決して不可能ではないと考えている。
- ・産業のリノベーションは、今年度末に策定するデザイン計画に盛り込んでいきたいと考えている。

【ファシリテーター 清水義次さん】

- ・地域が発展するのに欠かせないのが、産業のあり方である。質の高い働き甲斐のある産業を備後圏域にどれくらい沢山生み出すことができるかが、人口問題の最終的な答えになるだろう。このまちに帰ってきて、働き生活したいと思っている若い方は多いと思う。残念ながらその受け皿が時代の変化とともに消えてきて、若年層が流出している。原因と結果を良く考えてみようというのは今回のテーマである。駅周辺がその周りの産業の表現する場になればいいのではないか。
- ・働くスタイルの問題が非常に大切で、ユニークな働く環境を駅周辺に持てたら駅前再生は本物になる。
- ・伏見町は徐々に変化している、三之丸にも変化が起こって欲しい。三之丸公園が使われているだけでリムとの距離が縮まったような気がする。

〈ゲストトーク〉

【株式会社リ・パブリック共同代表 内田友紀さん】

- ・福井市を舞台にしているXスクールについて紹介したい。特に福井の繊維産業と一緒に取り組みを紹介したい。リパブリックは6年前に創業した。ミッションは縦割りの垣根を越えて新しく変化していく共同体を作ることである。
- ・立ち上げの経緯は、東日本の震災後、一つ一つの組織だけでは課題解決には力不足で、縦割りをどうやって解き、仲間を作っていくかということだった。
- ・自治体や企業の人材開発、企業の研究開発、大学のプログラム作成などを行っている。広島県のイノベーターズハンドレットにも関わっている。
- ・福井市の取り組みとしては、尖ったこともできないが、人材は不足しているという中規模

都市ならではの課題がある。若者の流出が顕著である。そのなかでまちの記憶をいかに見せていくか、外からどうやって人に来てもらうかを考えていた。

- 地元には長く積み重なった産業や文化がある。それを生かし、地域を越えた人の流れをどう作っていくか。結果、産業や文化がアップデートされる。
- どうやって繋いでいくかという課題に対しては、2016年から地域を越えた人の流れと仕事を作る、をテーマにmake.f UKUIというプロジェクトを開始した。
- 大事にしたのは、福井というまちが新しい価値を作る舞台となることである。人を招く戦略として来て経験して買ってではなく、新しい価値を創出する場所という目的地にすることが大切である。
- 福井の地域産業に注目し、そこを基点にプログラムを作ろうと考えた。そこで生まれたのがXスクールである。次代をデザインする人のための小さな教室である。全国各地から専門性の異なるメンバーが集まり、福井の文化、産業、風土を紐解いてプロジェクトを創出することをめざしている。Xは、XS=極小から出発して大きくする、エクスペリエンス=experience（体験）から学ぶ、X=掛け合わせという3つの意味を持っている。
- 主役は地元のパートナー企業で毎年3社、これに全国から公募する専門家やクリエイターが加わる。地元の企業と連携して様々なサービスが生まれている。
- Xスタジオも紹介したい。これはジャンルの枠組みを超えて共にプロジェクトを作る実践的な2日間の学びの場である。100人ごとで県内50名県外50名という構成である。
- 4ヶ月のプロジェクトのテーマが「繊維」だった。福井は1000年を超える繊維のまちである。明治までは絹織物、戦後は合成繊維が主だった。家内工業からグローバルな先端企業まで様々なジャンルと規模が集積している。BtoBが多い。
- 北陸は湿度が高く、水が多いので絹織物に向いていた。そこを基点に化学工業や機織機の機械工業が発展した。
- Xスタジオのプログラムは繊維業界と異なる分野の人が出会ってコラボレーションするというものである。4ヶ月で起業はできなかったが、未来に投げかけるためのプロジェクトをつくるというものになった。
- 3つのスタジオに1つずつ企業が入り、異なる専門性を持つスタジオリーダーと福井のローカルリーダー、地元のパートナー企業、全国から集まる様々なメンバーでチームを構成した。120日間の対話と実践の場である。
- 前回参加したのは、繊維商社、ユニフォームなどに絵柄を転写する国内トップの会社、レースの請負会社などである。
- 毎月福井に集まってワークショップし、期間中はオンラインで議論もする。
- 毎月のスタジオワークはオープンで、各地から見学に来てコラボレーションすることもできる。まずは福井の食を知ることから入り、工場見学なども行う。
- 議論や分析を重ね、手も動かしながら素材の可能性に向き合ったりする。たどり着いたプロジェクトの種を東京と福井でそれぞれ300人ほどを前にプレゼンテーションする。

- ・繊維商社は、地元のデザイン会社と協力して工場にツーリズムの形で色んなクリエイターたちを招くというプロジェクトを立ち上げ実践している。
- ・レース会社は、デザインセンスが見いだされ、金沢のホテルの1点ものの内装や県立図書館の空間構成を一緒にやるなど、ワークのプロジェクトメンバーと自社ブランドを立ち上げた。
- ・2017年度のパートナー企業だった味噌の会社は、まちの民話と民話にでてくる味噌を合わせたプロダクトを開発し商品販売している。
- ・波及効果として、フォトグラファーやデザイナーなどが移住し始めた。
- ・どういう人に来て欲しいかを考えた上で、その人たちが乗っかる場を作ったら結果的に仕事の多様性が増え、プレイヤーが活躍し始めた。
- ・今ではXスクールのコミュニティ関係者が130人を超えている。共に学び変化する共同体が作られていることが重要である。
- ・地方都市において成長モデルは過去のものとなっている。今ある資源やネットワークを違う角度でどう見つめ直し、もう1度再価値化する面をどう持つかが重要である。
- ・その時に今まで繋がっていなかった業界の人たちとの出会いが、次の時代のインフラストラクチャーになるのだと思う。
- ・また循環型社会への対応も避けて通れない。特に繊維は産業の中でも2番目に廃棄物が多いと言われている。これはファストファッション分野も含め、世界中の課題となっている。
- ・今年のXスクールは、繊維の会社、資源リサイクルの会社、繊維から発展した化学の会社の3社で開催する。これからの循環型社会をどう作っていくかが、大きなテーマになる。
- ・この他に、工芸的、クラフト的な産業と工業の共存する場、その掛けあわせで何が生み出せるかというお題も作っていききたい。
- ・第1期のメンバーがメンターとして参加したり、全国から勝手に集まって手伝ってくれたりというコミュニティができると、その人たちが積層する場も欲しくなる。自分たちの取り組みが見えるような場は作っていききたい。
- ・WHOLE EARTH CATALOG (PACE LAYER : ペースレイヤー) についても紹介したい。内側は変化が遅く、外に行くほど変化が速いということを示している。ファッションや商業は変化が速く、この図でいうと外側に位置する。繊維をコマースやファッションの領域だけで考えるかもしれないが、カルチャーやネイチャーとの関連をどう作っていくかが重要だと思う。
- ・他地域の事例も紹介したい。これはオランダのテキスタイルラボで、建物だけを残して産業は捨てた事例である。
- ・海外と比較すると、日本は作る現場と知識産業が共存していることが特長だと言われた。ヨーロッパは東欧やアジアに産業拠点を移したので作る現場としては何もできない。
- ・オランダは繊維産地としてかつての工場をラボやギャラリー、博物館として展示する場に

変えている。その一方で研究開発に特化して、小ロットで開発でき、別のところで生産している。オランダは知識産業に特化して強さを見出そうとしている。

- ・久留米市広川町は緋の産地で、産地内外と産地関係者を繋ぐ施設が設けられた。それがワークショップの場とゲストハウスである。
- ・日本各地の新しい動きをしている人たちを繋げたテキスタイルネットワークがスタートしている。
- ・広川町、播州、尾州など色んな産地で若い人たちが取り組んでいるのを横で繋げて、課題を一緒に考えていこうということをやっている。

- ・イタリアのカシミヤウールの会社では、自分の地元によりよい雇用を作るために立ち上げたブランドがある。成功して多くの人を雇用し、図書館、シアター、クラフトの学校など、企業がまちに再投資している。
- ・ルーツは昔からそこにあつたものでなくてもいい。未来に何を根付かせるかを考え、人も育て、文化も育てる場所をめざしている。
- ・福井県鯖江市ではリニューという、工場開きのイベントを行っている。ここは半径10キロ以内に5つの伝統工芸が残っている稀有なまちである。移住してきた仲間が工場を開きモノを作る現場をみてもらう。一方で他の人の目にさらすことでどんな反応が返ってくるか、お互いの好奇心とコンフィデンスを高められる。毎年多くの人が集まりコラボレーションが生まれてきたりする。
- ・ファブラボでは3Dカッターとかのデジタルファブ리케이션を活用し、個人がファブリックを作っていく。これからのニーズを掛け合わせると可能性を感じる。
- ・産業を考えることは、歴史や文化や人を見つめ直すことである。その上でどんな舞台を用意し、まちの人たちがそれに触れるチャンスを得るかが重要である。

〈実践者による事例発表〉

【岩瀬さん】

- ・岩瀬商店という染料の販売店をやっている。そこで「ソメラボ」をスタートした。ここは染めで遊べる場所である。
- ・我々の染料業界も厳しい。明るい生き残り戦略を考えている。
- ・業界からみても生産拠点が海外に移っていて染料の売り先がなく、しかも技術的な後継者もない業界となっている。そこで、明るく楽しく染めるということを発信することを仕事にしていくことにした。
- ・自宅でも染められるようネット販売や染めパーティもしている。
- ・サンガラスのフィルムメーカーからフィルム用の染料を共同開発するなど、テキスタイルだけでなく別業種とのコラボも進めている。
- ・例えば飛行機の模型、USJのロープ、ボタンメーカーなどからの依頼もある。寺の引き

出物を配る風習の商品開発の手伝いも行った。

- ・スタッフが楽しく染められる場所として、ソメラボをつくった。コンセプトは染めで遊ぶ実験室、である。色んな業界とコラボしている。
- ・インターンシップの学生にソメラボで外国人向けのメニューを考えてもらった。染めで社会貢献しようと、ミモザの日に近隣の人と黄色一色にするイベントも行った。
- ・企業としての質を保つため、定期的に染めカレ、社内の勉強会を行っている。
- ・メディアに取り上げられたり団体が来たりすると、同じ町内の人が喜んでくれる。まずは地元である胡町から彩っていこうと、戦略を進めている。

【島田さん】

- ・せとうちPEDAL L i f e (ペダルライフ) という団体を立ち上げている。鞆や内海など風光明媚なエリアをもっと広めていきたい。
- ・福山にはもっとポテンシャルがあると考えていて、実際最近外国人が増えている。広島、尾道はホテルのキャパシティが一杯で、福山に来て瀬戸内を観光している状況だろうと思っている。
- ・福山の観光を発信していきたいと思っていた頃、福山にサイクリングロードができるという話を聞いた。福山駅前から尾道まで繋がる海沿いのルートを使えば、いい観光ルートになる。
- ・駅前からせとうちのコンテンツにアクセスするために自転車を用意すべきという思いで、せとうちPEDAL L i f eと名付けた。自転車のあるライフ、ツーリズムをめざしている。
- ・第1回のイベントで動画を撮り、Y o u T u b eにチャンネル登録した。おそらくサイクリングロードのPR映像が出来るのはずっと先だろうが、その前にSNSで発信したかった。
- ・その後は福山で活動中のプロのサイクリストの安全教室などのイベントも行った。初心者にアドバイスをしたり、内海に行っておいしいものを食べたりした。
- ・めざすのはサイクリングを楽しむのではなく、ツールとして自転車を使って欲しいということである。海沿いでおいしいものを食べたいとか、お寺のヨガの体験、そこに行くまでのツールとして自転車を考えている。
- ・PEDAL K I D Sくるーずとって、小学生が田尻から鞆の浦まで自力で行って成功体験や冒険気分を楽しむイベントを考えている。自転車の安全教室も同時開催する予定である。
- ・今後の展開は早ければ来年2月にレンタサイクル事業を開始したい。
- ・自転車を通じてせとうちの色んなものとコラボしていきたい。

【黒木さん】

- ・「HITOTOITO (ヒトイト)」繊維産地継承プロジェクト委員会のメンバーである。繊維の産地で縫製工場の経営者が集まって会議をし、課題を解決していこうという組織である。
- ・現場の状況としては、カジュアルな縫製工場で規模も大きくない。働き手は、現状外国の研修生がほとんどで、技術を継承していくためには日本人の技術者も必要だと感じている。
- ・募集しても人が来てくれないという状況である。そもそもリクルートを考えたときに選択肢として入っていないのが実情だと感じている。まずは知ってもらうことが大事、やったことが無いと入りにくいのではないかと思い、学校をやったらどうかということから2016年にプロジェクトを立ち上げ、去年プレオープンし、今年9月からスタートした。
- ・スクールでは1ヶ月間、平日3時間、4名でスタートし、卒業制作は自分のジーンズを作ることである。工場見学として生地ของบริษัท、洗いの工場、ファスナーのYKKなどにも行って勉強しながら産地を学ぶ。工場見学はリクルートの意味もあるので、働いているところも認識してもらう。
- ・スクールの目的は、縫製工場に入ってくれる人を探すことである。1期生で委員会の中の工場に就職してくれた人も出た。これは1つの成果だろう。
- ・工場見学のイベントとしてせとうちファクトリービューでスクールを見せることもやっている。スクールも小さい工場のようなものなので見学してもらう。
- ・こうした活動で、色んな人間関係が生まれたり取材が来たり、興味がある人が増えた。今までの仕事の仕方だとそんな関係性は生まれなかった。委員会メンバーの工場経営者の意識の変化も生まれてきている。
- ・スクールは1つのツールで、これから新しい展開を期待している。卒業生を受け入れる新しい工場の形態ができないかと考えている。協力者の中にはクリエイター的な人もいる。外に出ることがなかったので、まだまだ可能性があると思っている。

<意見交換>

- ・自分の住んでいるまちで何があるか、小さい頃は知らない。どうやって発信するかが課題と感じた。
- ・福山高校の授業の一環として参加している。若者が新しいものを求めていく時代に、核となるものを持っておきながらどのように変化していくかが大切だと感じた。
- ・福山駅前のまちづくりは、10年くらい頓挫している。福山の若い人は元気で、西日本で元気なまちは福山だと聞いている。ただこれは一過性の可能性があり、親子3代で来られ

- るまちは駅前だと思う。
- 地元でお寺プロジェクトというものをやっている。昔、お寺はコミュニティの場だった。若い人を入れようと洋画教室など開催している。
 - 駅前には空隙がないと感じている。文化が生まれるのは空隙がなにかを埋める形で生まれるものだと思う。駅前に必要なのは皆が自由に使える空隙のような場所だと思う。
 - 今日の話聞いて、色んなことが起こっているがそのことを知らなかった。情報の交換がより密に起こって、知らない視点を持った人と新しい視点を持っていくと素敵なことに繋がるのではないかな。もっと広がって行ったらいいと思った。
 - ワイナリーをやっているが、ブドウを作る現場、ワインを作る現場、それぞれで課題がたくさんある。異業種の人とは中々繋がれないので、繋げていただくと、例えば今まで捨てていたものが産業になったりするのではないかなと思う。
 - 色々な話を聞いたが、活動が点在しているので、三之丸エリアに集約することが出来れば、エリア価値も上がり、エリアのコンセプト、職住混在に繋がってくるのかなと思った。
 - 色んなことをやっているが点在していて、ネットワークを再定義するしくみがあれば大きく変わると思う。素材は素晴らしいものがある。福山にはポテンシャルがある。
 - 福山市がプラットフォームになるのか、市の中でも色々な会議をしているが同じようなことをしている。繋ぎ役、ハブの機能や人が重要だと思った。
 - 市内で製材業をやっている。福山はJRで南と北に分かれている。新幹線が出来るとき2重高架になると聞いていたのに、分断されたままになっている。JRを巻き込んで北と南を繋げて人の流れを南北にしたい。そのために木材を活用したい。
 - 福山城の伐採された木を城北中学校が使うために製材しているが、まだたくさんある。その木も使ってみればいいと思う。
 - 屋外設計やランドスケープデザインを専門にしている。
 - 岐阜県の多治見の駅前広場の設計をしたとき、公園はボランティアによる管理を求めることが多いと思うが、まちの物知りおじさんの話×ボランティアで、人がたくさん来るようになった。思った以上に一般の人はプロの世界を見るのに興味があることが分かった。
 - 繊維の文化、働く様子、仕組みをうまくプレゼンテーションしたら、興味のある人はたくさんいるのではないかな。
 - 本業はメンタル系の仕事、ベトナム料理の店を始めた。福山には約1万人の外国人がいる

が、そのうち約3千人はベトナム人である。

- ・ 日常の生活においても、職場などで外国人がいる状況に福山もなっている。彼らも今後福山で市民として過ごす日がもう来ている。
- ・ そんな外国人に福山の産業を知ってもらい世界を含めたまちづくりが出来たらいい。リムの内部にいるものとして、何か出来ることはないかと参加した。
- ・ 福山駅前には条件が整っている。文化施設が新幹線の駅のすぐ側にある。新幹線のぞみ止まるので半日から1日移動でかなりのエリアの人に来てもらえる。平地なので自転車でもかなりの距離を移動できる。
- ・ 企画で思いついたのが、今は新幹線の途中下車が出来ないが、2時間で再入場できるというシステムができれば、例えば駅前に海鮮市場があれば鮮魚を買って真空パックして福岡まで持ち帰られる。そのまわりに土産や地域の産物を置くなどできないか。要は新幹線の途中下車が可能になればと思った。
- ・ 先ほど木材の話があったが、今の駅前はコンクリートなど冷たいイメージのものが多い。治安が悪いと言うイメージがあって、南は明るい北は暗くて歩きにくい。
- ・ 木材は暖かいイメージがあるので木材を使いながら、北と南を明るくできるようなものができればいい。
- ・ 知らなかったという話が多かった。いろんな年代いろんな職業の人たちが集まって意見交換できる場があればいい。少数で話して意見を出しあってまとめるというような会議があればいい。
- ・ 最近力を入れているのは三之丸公園の活用で、これはリノベーションスクールがきっかけになった。社会実験として公園にベンチをつくったり、音楽イベントをやったり、今後公園をうまく活用するにはどうすればいいかということに取り組んでいる。
- ・ まちなかに空隙があればという話があったが、隙間＝オープンスペースになるのが公園だと思っている。公園という空間を活用したい人をサポートしながら、誰でも自由に使える公園作りをめざしている。
- ・ 11月3日は色々な場所でイベントがあるので、そこでの回遊性や可能性を見ながら、拠点があって目的があれば人はまちなかを歩くと思う。そこで発見があれば新しい動きが出てくると思うので、そういうチャレンジもしていきたい。
- ・ 木工というものは、昔は家族のために素人が椅子や机をつくっていたが、それが仕事になり産業になった。駅前を変えていこうといった先に、今の若者の子どもや孫がこんなもの作ってくれてよかったと思える取り組みだと、長続きするんじゃないかと感じた。

【内田友紀さん】

- ・福山ではデニムスクールの現場や篠原テキスタイルなど回って、すごく資源が豊かな地域だと感じた。
- ・ルーツがあり、ストーリーがあると人の心は動く。色んな人のストーリーが繋がる旅をしているような気がした。それは携わっていない人にとっても面白いものになると思う。
- ・工業、木材、食など、広島は日本を凝縮したような産業の集積があると聞いたことがある。かつ面白い人がどんどん繋がっている。間を繋ぐデザインが少しずつ重なっていくだけで、何の心配もないと感じた。そのまちだけでなく、エリアを越えて学びあったり出来るかと確信した。

【清水義次さん】

- ・内田さんの福井でのレクチャーに、福山、備後圏域で考えていくと人がうまく繋がるきっかけ作りがある。人のつながりが何かを生んでいくんだらうと強く感じた。
- ・今は、個別の活動が個別のグループによって行われるという感がまだまだ強い。これがもう1段クロスする形が生まれたとき、本当の福山全体の再生に繋がる可能性があるのではないか。
- ・私もテキスタイルロードを案内してもらったことがあるが、昔から今へ繋がるロードでもあり、今現在、新市町あたりの広い範囲でテキスタイルに関する業種が連なっている。最終結果を見島に持っていかれているみたいな、おいしいところが外に出てしまっているのが勿体無い。
- ・ブランディングという言葉があるが、付加価値をどうやって作るかが課題で、ストーリーを作れたら付加価値は作られる。
- ・ブランド物のブームを作るとき、ブランドストーリーを作ると思わぬブランドが成長することがあった。嘘は駄目だが、材料があるものを元にブランドストーリーを書くことは大切なことである。ストーリーがブランドを作るという考え方を持って、いくつかのいい素材を繋ぎ合わせてもいいからストーリーを作ったらどうだろうかと感じながら話を聞いていた。
- ・福山はビーズからタンカーまで多様な製造業の集積体が周辺部に分布しているまちだと思う。専門家に言わせれば、そんな集積は浜松か福山かというくらいだよ。これがすごく資源になっているが、生産方の供給元にしかなくなっていないのが、残念なところ。これを、ストーリーを繋げながらどう表現するかが大切だろう。
- ・高付加価値化が地場で起こるようになるには、駅前を使い方が大事だ。城が、新幹線のぞみが止まる駅の目の前であるところとして、空間の利用の仕方が勿体無い。三之丸町あたりにはどんな場があったらいいのか。色んな国の方が集まる空隙があり、文化が交錯し、元々は瀬戸内海という文化が行き交った海の動線であったのが福山である。天然の良港があり、お城ができた。ツーリズムとしてはせとうちの方を見ながら、福山が途切れてい

るのを繋いだほうがいい。

- 立地，歴史，今現在の産業が活かされるストーリーを，人が繋がってどうやって作っていくかが，一番の課題だろう。
- ジャンルが違う人たちの距離間が掛け合わせでどう詰まっていくかが勝負だ。産業のリ・ブランディングをテーマに持続する福山のまちを作っていって欲しい。